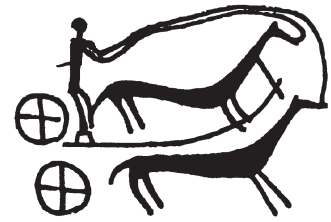


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 68



18年度新科目「情報学」 (6 ページ)

単位の実質化は本当か? (8 ページ)

北大教育ワークショップ開催される (10 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

「学生生活実態調査」における 学生の要望に答えて

言語文化部 教授 大野 公裕

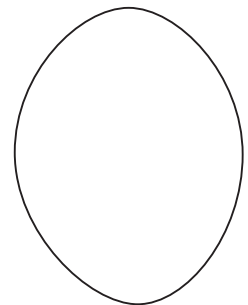
先日、本年度実施した「学生生活実態調査」(前回は4年前に実施)における「北大に対する今後の期待・要望」に対して、回答の作成を依頼されました。学生からは実にさまざまな要望が出されていますが、ここではその中でも特に全学教育に携わる教員に共通する問題について感じたことを述べてみたいと思います。

まず、一番目に付いたのが「教養の授業はつまらない、面白くない」という不満でした。「いろいろな分野の授業があり、非常に面白い」という意見もありましたが、つまらないという意見の多さは回答をしていてやや憂鬱になるほどでした。この問題は、もちろん教員の側にも原因があるかもしれませんが、学生を飽きさせず、面白く講義ができればいいのですが、それをうまくできる人は少ないでしょう。こ

のことを断った上で、概略以下のように回答しました。

《授業が面白くないという不満がどうして出てくるかを考えてみると、一つには学生諸君の側にも問題があるのではないかと

思います。全学教育科目全体を見渡してみると、特に主題別科目や一般教育演習などの選択科目では、さまざまな領域の授業が提供されています。それにもかかわらずそのほとんどが「つまらない」というのは、授業を受ける側の興味・関心の幅があまりにも狭いからではないでしょうか。自分の専門や興味のあることだけを考えていませんか。



日頃から世の中のさまざまなことに対して疑問を持ったり、自分で考えたりすることがなければ、ほとんどのことは「つまらない」ものになってしまいます。この意味で、あることを面白いと思うかどうかは本人次第だといえます。面白さは人から与えられるものではなく、自分で見いだすものなのです。何の問題意識もなく、ただ漫然と面白い授業を期待するという受身的な姿勢では、いつまでたっても面白いと思える授業には出会えませんし、今の自分をより大きな、豊かな人間にすることもできません。》

最近の学生は、中高の教育制度の中で校則や点数主義に縛られ、上から与えられたものに答えていけばよいのだという考えが強すぎるため、積極性が生まれてこないのでしょうか。すべての学生がそうだとはいませんが、この傾向はしばらく前から続いているように思います。この状況を打破するには、私たち教員の側も、今教えていることがいかに世の中の他のこととも繋がっているかということの日頃から学生に気付かせていく努力が必要だと思います。そうすれば、学生も受験勉強では得られなかったような物事の中の深い繋がりを発見し、おのずと「面白い」授業だと感じるようになるのではないのでしょうか。

次に多かった意見・要望は「教養の授業は無駄だった、必要ない」、「もっと将来役に立つ授業をやってほしい」というものでした。これには以下のように回答しました。

《教養科目の目的・意義は、単に非専門領域の個々の事柄を習得することではありません。これらの事柄は確かに試験に出題されるかもしれませんが、試験が終わればすぐに忘れてしまうでしょう。そうではなく、大事なことはこうした個々の事柄の

背後にある基本的な考え方やものの見方を学ぶということです。表面的な個々の事柄を生み出しているより深いレベルのメカニズムに関する知識や理解に目を向けるということです。これは一生記憶に残りますし、その後の自分の専門を研究する上でも就職してからでも役立つはずで、そして、こうしたものの考え方や見方がその人のいわゆる「教養」と呼ばれる部分を形成するのです。「教養」というのは単に「幅広い知識」という意味ではないのです。全学教育で行っている教養科目の授業の中には今は実用的とは感じられないものがあるかもしれませんが、このような大きな視点で捉えて、その後の人生に役立てるつもりで向き合ってください。・・・(以下省略)》

「教養教育の意義」はこれまでいろいろな機会に何度も議論されてきたことで、私たち教員の側では了解済みの事柄だと思うのですが、それが学生にはうまく伝わっていないようです。これも先ほどの問題と同じように、物事の中の横の繋がりが今ひとつ見えてこないということが原因なのだと思います。実際、アンケートを見ると、学年が2年、3年と進むにつれて教養教育の重要性に気付く学生もいるようです。自分の専門分野についての知識と理解を深めることによって「横の繋がりが」見えてくるのでしょうか。幸い、平成18年度入学生からは、主題別科目と総合科目が(水産学部を除く)全学部・学科において1年から4年までいつでも履修できるようになりました。専門教育を受けながら教養科目も履修するという学生が増えてくれば、こうした不満は少なくなるかもしれません。また、私たち教員の側も毎回の授業に追われながらも機会を捉えて「教養科目の重要性」を学生にわかりやすく訴えていく努力も必要なのだと思います。

(高等教育機能開発総合センター長補佐)

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告 (第 66 回)

第 66 回 (平成 18 年度第 4 回)

12月12日(火)に第66回全学教育委員会が開催され、つぎの議題について話し合われました。

議題

1. 北海道大学全学教育科目規程の一部改正
2. 新教育課程の検証および改正
3. 平成 19 年度全学教育科目の開講計画
4. 平成 19 年度全学教育科目に係わる TA について
5. 全学教育における授業予定について-定期試験・補講期間の廃止-
6. 平成 19 年度全学教育部の行事予定
7. TOEFL-ITP の受験料に対する補助

報告事項

1. 平成 18 年度第 2 学期の履修調整
2. 平成 18 年度第 2 学期の履修者数
3. 成績評価・授業評価結果検討専門部会の報告
4. 18 年度入学者向けに実施したアンケート結果
5. 新入生に対する修学サポートの実施
6. 平成 19 年度全学教育科目シラバス作成
7. 情報探索入門, 北分館図書の充実

北海道大学通則改正に伴う全学教育科目規程の改正

ドイツ語, フランス語, ロシア語, 中国語の III を削除し, スペイン語・韓国語の追加, 外国語演習の改正, 日本語 IV を追加しました。

新教育課程の検証・評価-概ね順調に推移

H18 年度よりスタートした新教育課程, 単位の実質化, 上限設定制度, 学修状況の検証を行いました。

- ・ 1 学期の結果から, 全学の GPA 分布は, ほぼ 2.35 を中心とした正規分布となり, 昨年に比べ全学平均 GPA の大きな上昇がみられる。成績優良者に対する履修単位特例措置の該当者も 56.42% に及んだ。
- ・ 18 年度入学者の履修登録単位数平均は, 文系 (1 学期 19.85 単位, 2 学期 21.1 単位), 理系 (1 学

期 22.37 単位, 2 学期 23.71 単位) となっている。成績優良者に与えられる特例措置 (文系 21+4+4 単位, 理系 23+4+4 単位) に対し余裕のある履修となっており, 履修上限設定は概ね順調に推移している。

- ・ 2 学期特別講義「大学と社会」を上限設定外としたことにより昨年とほぼ同様の履修者数 (H17: 480 名, H18: 411 名) となる。コアカリキュラムを代表する科目の履修を促すため, H19 年度は, 各期「特別講義」と「一般教育演習」から 1 科目を上限設定外で履修できるように改正する。
- ・ 履修登録科目の取消し制度の導入。パス・ノンパス制度の一環として, 病気による長期欠席や「評価せず」廃止に伴う措置として, 6 月 (1 学期), 12 月 (2 学期) に「履修取消し」を導入する。ただし, 履修学期が指定されている必修科目は認められない。
- ・ 「一般教育演習」(フレッシュマンセミナー) を必修科目に指定していない学部学科に「履修推奨科目」と位置づけるよう要請する。教育効果, 効率を考慮し, 希望者が 3 名以下の演習の開講を取り消す。
- ・ GPA, 英語優秀認定, 翌期再履修等は順調に推移。
- ・ H19 年度は以下の修正を行う。
 - (a) 上限設定における特例措置を学期 GPA2.40 以上とする。
 - (b) 2 学期に加算される「再履修」の名称を「学期加算単位」と変更。
 - (c) 「予備科目」の名称を「追加・入替え科目」と変更し, 上限設定内で 6 単位まで可能とする。
 - (d) 「教職科目等」の名称を「上限設定外科目」と変更。
 - (e) 大講堂で行う授業では抽選による履修調整を行わない。

平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価, カリキュラム, FD 等の改善策 (報告)

教育改革室 WG の安藤座長から本年度導入した新学士課程を効果的に進めるために, これまでの履修

動向の評価・点検、今後の展開に対する改善策が報告され、了承されました。教育改革室、全学教育委員会の議論をもとに、今後の検証、中期計画、認証評価への対応、大学院設置基準等の改正点を踏まえ、3月の教務委員会までに最終報告をまとめることが了承されました。

19年度開講計画

H18年度の履修者数、H19年から一般教育演習を上限設定外とすること等を加味し、各部局から提供があった科目を調整し、以下のとおり了承されました。

- ・全体と開講帯ごとの開講コマ数をみて開講曜日、学期の調整をした。
- ・18年度の履修状況により、主題別科目、総合科目は2学期に重点配分。
- ・19年度一般教育演習が上限設定外となることから履修者の増加が見込まれ、1学期に重点配分。
- ・外国語演習の充実を図るため、提供科目のうち2科目を外国語演習科目として開講するよう依頼。
- ・一般教育演習 159 コマ (H18年 165 コマ)。
- ・総合科目 53 コマ (H18年 61 コマ)。部局1コマの提供がなされていないのは、経済、創成科学、先端生命の3部局。
- ・一般教育演習・外国語演習について、12月現在で部局別教員数あたりの提供科目数が達成されていない部局は、農学部、水産学部、創成科学、先端生命の4部局。依頼数を下回らないように依頼。
- ・H18年度、H19年度の各部局の授業担当状況を報告。各部局の授業担当状況表に基づき19年度の開講責任コマ数を集計した。20年度以降の負担については、教育改革室の全学教育実施体制運用の在り方検討WGで検討する。

平成19年度のTA

TAを必要とする理由、人数、経費を審査のうえ承認されました。現在調整中のものもありますが、概略3640万となり、H18年に比べ370万の増加となりました。これは情報学の非常勤講師削減による増分(220万)、英語II(40万)、その他の外国語(80万)、自然科学実験(30万)によります。TAを有効に利用して授業の充実を図っていただきたいと思います。

補講期間・定期試験期間を廃止

「単位の実質化」の一環として、16週の授業期間(補講及び期末試験を含む)を設定し、その中で各教員が計画を立て「15週の授業」を確保することを20年度から実施することが了承されました。現行の補講期間及び定期試験期間(2週間)は廃止されます。各学部では、19年度中に専門科目の定期試験のあり方の整備が求められます。

H19年度全学教育部の行事予定

H19年度は例年通りの日程で、1学期は4月10日、2学期は10月1日授業開始、補講日4日、定期試験期間2週間の予定となります。

TOEFL-ITP 受験料に対する補助

英語IIの評価判定にTOEFL-ITPを用いていることから、受験料(3,800円)の一部を試験補助すべきであり、今後、教育改革室等に強くはたらきかけることが了承されました。英語IIはCALL授業であるので、今後、言語文化部で作成予定のCALL授業の成果に関する報告書の検討が必要とされました。

2学期の履修調整、履修者数

外国語演習、一般教育演習等の履修調整が順調に行われました。2学期の履修者数は、本年度から導入された「評価せず」の廃止を考慮すると、ほぼ前年度並みでした。

教養科目(外国語を除く):前年度比84.3%

外国語科目:前年度比104.5%

基礎科目:前年度比91.6%

全体数での比較:前年度比92.7%。

成績評価結果の「極端な片寄り」

17年度2学期の成績評価における「極端な片寄り」についての問合せ結果(13科目)、18年度1学期の成績評価結果及び18年度2学期の成績評価の依頼について、成績評価・授業評価結果検討専門部会及び小委員会での検討状況が報告されました。

- ・「極端な片寄り」については、GPA値が成績評価の分布をかなり明瞭に反映していることから、従来の基準の他にGPA値も参照することとした。①外国

語科目では、履修者 20 名以上で「秀+優」60%以上、「不可」15%以上の場合、②理系基礎科目では、「秀+優」60%以上、「不可」20%以上の場合、③主題別科目(論文指導は除く)、総合科目及び文系基礎科目では、履修者 100 名以上で「秀+優」60%以上の場合、④クラス別の GPA が目標値(2.35)から±0.6 以上の場合は「極端な片寄り」にあたる可能性がある。

- ・ GPA の分布には「秀」評価の有無の影響も大きいことから、「秀」評価の活用(10～15%)に配慮願いたい。
- ・ 18 年度 1 学期の成績評価では、授業科目別の GPA 値が最高 4.0～最低 1.10、受講者 10 名以上の講義に限定しても最高 3.74～最低 1.10 と大きな幅がある。
- ・ 「社会の認識」、「社会科学の基礎」では、授業科目全体の GPA 値が 2.05、1.79 と低い。なかでも GPA 値が 1.91～1.25(社会の認識、8 科目)、1.86～1.10(社会科学の基礎、3 科目)と特に低い。
- ・ 「英語 I」では、GPA が 2.77～1.43 と幅があり、「秀」評価が少なく GPA 値が低い科目が 16 科目ある。
- ・ 成績評価の「極端な片寄り」については、主題別等 3 科目、外国語科目 10 科目、外国語演習 11 科目、基礎科目 2 科目に関して担当教員に事情を問合せる。
- ・ 18 年度 1 学期の成績評価結果(授業科目別、クラス別)を成績分布 WEB 公開システムで公表した。
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/seiseki/GradeDistSerch.aspx>
- ・ 18 年度 2 学期の成績評価にあたっては、極端な片寄りのない適正な評価について配慮を依頼する。

18 年度入学者向けアンケート結果

センター研究部で行ったアンケート結果が報告されました。上限設定で履修者が減少した選択科目では、「講義題目」、「シラバス」、「面白そうな内容」を選択理由に挙げています。上限設定のためあきらめた科目の有無の間には 76%が「なかった」としました。授業内容には 55%がほぼ満足、授業に 100%出席した学生が 66%、80%以上出席を加えると 97%となります。1 日あたりの自習時間は 1 時間が最も多く(42%)、平均 1.23 時間となる。GPA 値を気にしている学生が 79%、2 学期の上限設定はちょうどよい(54%)、多すぎる(34%)でした。

H19 年度入学生の修学サポート

生協と教務課の協力により、新入生に対し 4 月 8～11 日の 4 日間、修学サポートを行う予定です。

全学教育科目のシラバス入力

システムが研究協力から教務情報システムに移管され、「科目名」から「履修区分」までのデータが入力済みです。それ以下の項目を 1 月 31 日までに入力することとなります。

情報探索入門、図書北分館の充実

今後も一般教育演習の時間に、図書職員による「情報探索入門」を行う旨の依頼が北分館からありました。また、図書を充実し学生の学習の便を図るためにシラバスに推薦図書を複数記載すること、科目責任者に推薦図書のとりまとめを依頼することが報告されました。

(小野寺彰 理学研究院教授・センター長補佐)

18 年度新科目

情報学

情報学 I・II 企画委員会

情報科学研究科 教授 大内 東, 栗原正仁

工学研究科 教授 郷原一寿

情報基盤センター 教授 岡部成玄

平成 17 年度までの全学教育科目「情報処理 I」, 「情報処理 II」および「情報科学」の廃止にともなって、平成 18 年度から新設された「情報学 I」および「情報学 II」(以下、総称して「情報学」)の 2 科目について、そのねらいと今年度の学生の学修状況について概略を紹介します。

「情報学」のねらい

高等学校の新学習指導要領のもとで学んだ学生が、平成 18 年度から大学に入学してきています。新学習指導要領の大きな特徴の一つは、普通高校において教科「情報」を新設したことです。これは良く知られた 9 教科に続く第 10 番目の教科で、「情報 A・B・C」の 3 科目から少なくとも 1 科目を必修としています。

本学の「情報学」は、このような新しい時代に合わせて、これまでの情報教育を大きく改革するものとして企画しました。そのねらいは、これまでのコンピュータ操作スキル中心の初歩的な情報教育は高校までに終了していると考え、入学初年度の学生に、より高度な知的情報スキルを身に付けさせるとともに、情報科学の基礎を学ばせることによって情報技術の仕組みを理解させ、あわせて情報社会に参画するための倫理や法の知識とそれを遵守する態度を身に付けさせることにあります。

授業内容がクラス間でばらつかないように、教科書を編纂して学習項目を標準化したことも、ねらいの一つです。特に「情報学 I」は、ほぼ全員が履修するため、学習項目とともに指導方法や評価方法も、かなり具体的なレベルで標準化しました。

「情報学」は、情報活用 (Skill), 情報科学 (Science), 情報社会 (Society) の 3 つの内容 (3 つの “S”) から構成されます。

(1) 情報活用

これは情報処理に関わる「スキル」を教育するものですが、本学ではコンピュータを体で覚える「技能」ではなく、コンピュータを頭で活用する「知的基礎体力」を意味するものとして学習内容を企画しています。具体的には、データの管理と表現、情報の検索と表現などについて、利用者の立場からやや深く理解するとともに、実習を通じてそれを活用するスキルを身に付けさせます。

(2) 情報科学

これは情報技術の「仕組み」を科学的に理解させるための内容です。いろいろな情報のデジタル表現、コンピュータの構成と仕組み、アルゴリズムとプログラミングの基礎知識、コンピュータネットワークの仕組み、コンピュータの将来と限界などの内容から構成されています。

(3) 情報社会

これは情報社会における倫理、法、安全性、知的財産、個人情報保護などについて包括的に教育するものです。本学を含む全国の大学教員が合同で制作したビデオ教材を活用して、具体的な事例に基づいて基本知識を学ばせるとともに、情報社会に参画する基本的な態度を身に付けさせます。

「情報学」の学修状況

以下では、前期の情報学 I について、結果をふまえ、紹介します。ほぼ、全学生が履修しています。文学部、教育学部、経済学部及び水産学部は選択としていますが、情報社会における教養として、必履修とするのが適当と考えます。情報学 I は実習中心で、20 名規模のグループに分け、少人数教育を行っています。実習は、企画委員会を中心に作成した教科書及びプリントを使用し、情報基盤センターの教育学習支援システム ELMS を利用し、当然のことながら、ICT

(情報通信技術)を活用して行っています。また、単位の実質化の方針に沿い、大学設置基準にしたがい、授業時間外の学習を適正に求める内容としました。実際、毎週、学生が自己申告した過去1週間における授業時間外学習の時間は、平均約2時間で、妥当なところと考えています。このような授業を実施するために、非常勤講師のほか、50名余という多数のTAが、授業時間における実習指導のほか、実習後の指導に関わっています。情報学では、TAを、単なる授業補助としてだけでなく、大学院学生の教育指導能力の育成として積極的にとらえるべきであると考え、企画委員会のメンバーが、TAを主対象とする、大学院共通授業科目「情報学教育特論」を開講し、大学院教育と全学教育の連携を図っています。

図に示したように、複数の課題を併行させて進めました。実習ごとに作業報告を求め、テーマごとに必須要件（提出がなければ不可とする条件）を明示し、課題提出を中心に評価しました。キー入力は、毎回、5分間程度行って、授業時間外での練習を求めました。毎分平均50字程度の向上が見られまし

た。情報活用のスキルについては、文書作成でレポート作成の作法を重視するなど、大学として相応しい内容とし、情報基盤センターの教育学習支援システムELMSを活用して、情報検索、レポート作成、プレゼンテーション、討論、共同制作等において、学生同士の相互評価・協調学習を推し進めました。また、情報倫理教育を重視しました。

本年は、新入生の約4割が浪人生であり、また、高校における「履修漏れ」の問題もあり、高校の情報教育を全面的に前提とするわけにはいきませんでした。表に示したように、旧学習指導要領の学生が新学習指導要領の学生の入学時点に追いつき、新学習指導要領の学生がさらに向上するといった明確な学習効果が見られました。

外国語教育以外で、ほぼ全学生が履修する、情報社会における教養教育の要として、今後とも、北海道大学として相応しい内容で、学習量が多い質の高い授業が実施されるよう、指導法及び評価のあり方等を含め、改善に努めてまいりたいと考えています。

図2 文書作成での回答

旧は旧学習指導要領で学んだ学生、新は、新学習指導要領で学んだ学生。(前)は、前期授業開始前、(後)は、前期授業終了後。

図1 授業予定

「単位の実質化」は本当か？ その偽装を憂う

電子科学研究所 教授 (生物学, 英語演習担当) 副理事 下澤 楯夫

今回の「単位の実質化」のうち、「1単位は45時間の学修」と明記したこと、「評価せず」を排して「不可」としたことは良いと思います。しかし、実質化を阻む本質的矛盾を抱え、結果的に偽装を進めています。矛盾点は、「成績の評価の極端な片寄り」を是正する方策としてのクラス毎の相対評価にあります。下に述べるように、大学の単位は講義を聴くだけでは取れず、更に2倍の時間の自己努力によって達成した理解の世界共通の履修証明です。時間をかけて基準能力に達した学生には優・良・可を、達しなかった学生には不可しか出さないのが、世界共通の約束です。現行の相対評価では、最大でもクラスの10%しか落ちない(90%以上は受かる)のですから、殆ど自己努力をしなかった学生が卒業してしまいます(既にさせています)。これは社会から付託された役割に明らかに違反します。たとえば、

1. 大学の卒業ないし特定の科目の単位修得は、教員免許や危険物取り扱い主任資格など、社会的な特典を伴う多くの国家試験の受験資格とされており、また場合によっては資格試験の免除すら受けることが出来ます。すなわち社会は、大学の単位が絶対評価(ある基準以上の能力を持つことの判定)で与えられていることを前提にしています。
2. 工学系で始まったJABEE認定制度では、単位認定の最低ランクCを与えた試験答案は、JABEEからの要求があれば提出しなければなりません。すなわち社会は、絶対評価であることの証拠を残しておくと要求しています。
3. 北海道大学は既に、低い基準で単位を与えて学生を卒業させ、幾つかの「事故」を起こした過去を持っています。その一つは「東海村臨界事故」です。これは、単に無責任な卒業生個人が起した事故ではなく、大学の単位認定・卒業認定の甘さについての社会的責任を問われる事件です。社会は、原子工学科を卒業したからには「核分裂の臨界条件や、水酸化ウランから酸化ウランを作る際には決して沈殿が起こらないように攪拌装置を使

うなどの知識」の基準を満たしている、と思っています。基本を知らなくても最下位10%に入らなければ卒業できる、とは夢にも思いません。

4. もう一つは、実験室を冷やそうとして「液体窒素」を撒き、自分と学生を窒息死させた事故です。これは、物理の初歩の初歩「気体分子運動論」を知らない学生を卒業させたことに起因します。気体分子運動論とは、『液体の水1モル(18グラム, 18cc)は2.6cm角のおちょこ一杯程度だが、これが水蒸気になると約1000倍の22.4リットルになる(これは高校で習います)。つまり、気体は分子と分子の間が(液体の場合の)10倍も離れていてスカスカなのに、気体の分子が沈殿したりはしない。だから、分子は飛び回っていると考えざるを得ない』、ということです。これは現代物理学の基本のキです。これを理解していないのに単位を出したのです。いずれの事故も、基準に達していないのに単位を貰ったために、学生本人が不幸になっています。
5. 大学の単位を甘い基準で与えることは、学生のためにはなりません。単位の基準を国際標準に保つことは、社会のためだけではなく、結局は学生本人のためなのです。マーフィーの法則とやれば、表面化した事故の陰には、その数百倍の事故が隠されているといいますから、北大は社会に対して、かなりの負の遺産を輩出(排出?)していることになります。これは、教育と研究について「社会貢献」を第三の柱としている北海道大学として、由々しきことです。

教育の原点に立ち返っても、与えるべきは意欲であって、知識ではありません。いや、正しくは「大学教員の役割は学生の中に潜む意欲を引き出すこと」です。上の事故例が示すように、意欲を持たない学生には知識を授けることすら出来ません。学生に意欲を授けるのは、親や家族しかいません。学生に意欲を与えることが出来ると思ひ込むこと自体が、大学教員として傲慢です。ましてや、講義内容を、自

習を要しないレベルに下げた成績を相対分布させ、学生の意欲を削ぐなど、もつての外です。

10月のアンケートの結果は、私の危惧を直接に証明しています。1日の自習時間「1時間以下」が全体の70%を占めているのです。まるで小学生並です。学生が自習時間を過小に答える利点は思いつきません。「1単位は45時間」を明示しただけで、学生がそう行動する訳はないのです。不可を10%以下に抑えた相対評価制度を続ければ、こんな小学生みみたいな勉強時間の学生の大部分に単位を出し、卒業証書を渡すこととなります。有島武郎の「カインの末裔」ではありませんが「少しでも考える力を持った人なら」、結末はどうなるか分かるはずです。暗澹たる結末を望まないのなら、講義では45時間の自己努力を要する課題を提示し、理解が基準に達しているかどうかを判定する。これを実行するしかありません。

アンケートによれば、学生の80%はGPAの高低を意識しています。にもかかわらず、1日あたりの自習時間は1時間以下なのです。GPAという「アメ」で釣っても自習はしないのです。1学期の履修単位が10単位(1日に1講しか受けない)としても、1日4時間以上の自習が必要なはずなのに、です。つまり、『講義のレベル自体が45時間の学習を必要としないインチキ講義』だから、学生は自習の必要を感じることが無いのです。アンケートは、謀らずも、このことを証明しています。

北海道大学は「国際性の涵養」を教育の目標の一つとしています。しかし、英語をしゃべれば良い訳ではありません。北大では、小学生並みの自習時間でも90%は卒業できるのですから、母国語ですら、まともな内容など語れません。大学の単位とは世界共通の「履修証明」です。世界の大学では、自己努力を要する達成基準で判定しています。たとえ流暢な英語をしゃべれても、他国の大学卒業生とかみ合った議論が出来なければ「国際性を涵養」したことにはなりません。空しい言葉に過ぎないのです。英米では小学生でも流暢な英語をしゃべります。しかし内容はやはり子供の話に過ぎません。相対評価を続け、子供のように内容の無いおしゃべりしか出来ない学生に単位を出す北海道大学は、国際的に見れば、「単位を偽装」していることとなります。

「聞いただけで分かる講義をして良いのか?」と題して、教員向けにセンターニュースに投稿し(No.18:4-5, 1998 June), 続けて「聞いただけで分かるのが良い講義か?」と題して学生向け広報誌「えるむ」(第89号:8-9, 平成10年9月)に取り上げてもらったのは、もう8年も前です。当時、学生による講義の評価が始まり、大学本体も分かり易い講義をするように求め始めていました。しかし、私は、肝心の学生が余りにも勉強しないことに憤りと嘆きを覚えていました。それで、「大学の単位とは、教員の指導の下で45時間の勉学をし、試験に合格したものに与えられる世界共通の『履修証明』であること、大学の講義とは、勉学時間の1/3(15時間)だけ与えられ、学生が残り2/3の時間を予習・復習に割いて始めて理解できるレベルであるべきこと」を要点として、注意を喚起したのです。

幾つかの学部の教務担当教員から「良くぞ書いてくれた。コピーや引用で使わせて貰います。」というポジティブな反応があったものの、「GHQの占領政策の名残で・・・」といった教育史知識の披瀝の材料にされたり、「45時間も学生と付き合っていられない」といった頓珍漢で低レベルの議論が出始めたので、嫌気が差してそのまま放っておきました。ただ、自分の講義の受講生には「えるむ」の記事のコピーを配布し、注意を喚起し続けました。

「大学の単位」の本来の意味を理解していない受講生と私の講義基準のギャップは大きく、毎年の受講生の約半分は脱落して行きました。ここ数年は毎年「成績の極端な片寄り(評価せず+不可が50%以上)」の説明を求められて来ました。しかし、踏みとどまった学生の半数からは、「北大に入って一番有意義な講義だった。初めて大学らしい授業を受けた。厳しいことを言うがその通りだと思った。極めて難しいが、生物学の面白さが分かった。休講時にはレポートを課すなど勉強になった。結構面白かったよ、マジで。」などと、肯定的な反応を得ています。学生の半分は、高いレベルを要求すれば何とかよじ登るだけの意欲を持っているのです。

このような経緯もあって、この記事を書く破目になりました。

高等教育 HIGHER EDUCATION

単位の実質化の方策

—第9回北大教育ワークショップ開催される—

「第9回北海道大学教育ワークショップ」(Faculty Development, FD)が、11月10日(金)、11日(土)の両日、奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北の湯)で行われました。本学の研究科及び研究所等から25名、北見工業大学、室蘭工業大学、北海道工業大学、秋田大学から1名ずつ、弘前大学、旭川工業高等専門学校から2名ずつの研修参加者合わせて33名に、世話人、講師、事務職員など合わせて総勢39名で実施されました。

今年は総長が用務のため奈井江まで行くことが不可能で、総長の挨拶は事務局大会議室で行われました(そこで受付も事務局大会議室で行いましたが、この形式も悪くないと思われました)。午前9時より総長の挨拶があり北海道大学のさまざまな問題について説明がありました。総長のお話のあと、9時30分に記念写真をとってバスに乗り込みました。

奈井江町へのバスに乗ってから、例年のように、参加者の自己紹介という形で研修会が始まりました。会場にはバスが予定通りの時間に到着し、午前10時45分より、表1のようなプログラムで研修が始まりました。

今回のワークショップのテーマは、「単位の実質化の方策」です。今年度から一年次に導入された「履修単位の上限設定」によって、1科目当たり学生が割ける時間が増加し、「2単位は90時間の学習に相当する」という国際基準を実現する環境が整ってきたいま、「単位の実質化」を実現することは全学教育における現時点での最重要課題です。

ワークショップのメインプログラムでは、参加者を5グループに分け、単位の実質化を実現するための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で、グループ作業を行いました。

授業の設計は、3回のセッションに分けられ、(I)科目名と目標、(II)方略(15回分の授業内容)、(III)「評価基準」、の順に行われました。おのおののセッションは、(1)30分程度のミニ講義、(2)小グループに分かれての60分の討論、(3)全員が集まっての討論の成果の発表会、という3つの部分からなり、このセッションを繰り返すという構成で行われ、例年のように有意義な会になりました。

より具体的には、参加者全員が専門分野が片寄らないようにA、B、C、D、Eの5グループに分かれ、

それぞれのグループが、あらかじめ指定されている

- A：一般教育演習
- B：一般教育演習
- C：一般教育演習
- D：特別講義

E：総合講義（総合科目）

のような設定の科目を設計するという課題にいどみました。

各グループが設計した科目の科目名、目標は次の通りです。

表 9. 第 9 回北海道大学教育ワークショップのプログラム

11月10日（金）	
8:30	北大事務局前集合（事務局大会議室で受付）
9:00	挨拶「FD実施にあたって」（中村総長） 事務局大会議室
9:25	記念写真撮影
9:30	バス 出発 研修開始：オリエンテーション
10:40	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着
10:45	ミニレクチャー「FDの目的と意義」
11:15	ミニレク「GPAと単位の上限定について」
12:00	昼食
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング
13:30	ミニレク「カリキュラムの構成要素とシラバス」 「学習目標」
14:00	グループ作業 I の課題の説明
14:10	グループ作業 I 「授業の設計 1：科目名・目標の設定」
15:10	発表・全体討論
16:00	休憩
16:20	ミニレクチャー「教育方略」「講義について」
16:50	グループ作業 II の課題の説明
17:00	グループ作業 II 「授業の設計 2：（目標の手直しと）方略」
18:00	発表・全体討論
18:50	夕食
19:30	休憩（風呂など）
20:20	講演「アカデミック・ハラスメントについて」 （大畑昇歯学研究所教授・学生相談室長）
21:00	懇親会
11月11日（土）	
7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」
9:00	グループ作業 III の課題の説明・
9:10	グループ作業 III 「授業の設計 3：（方略の手直しと）評価」
10:10	発表・全体討論
11:00	休憩
11:10	参加者の個人的感想や意見
12:00	昼食
13:00	バス出発
14:30	北大学術交流会館前到着

<グループ A>

科目名：一般教育演習「温泉学」

一般目標：

火山国である日本では温泉は非常に身近な存在である。温泉は我々の生活にどのような影響を与えてきたのだろうか？ この演習では様々な観点を通じて温泉の役割を理解する。

行動目標：

グループワーク

- (1) 集団での討論および意志決定ができる。
- (2) 情報収集の手段を列挙し（インターネット、図書館の利用など）、実際に利用できる。
- (3) 収集した情報を加工し、相手に分かり易く伝達（プレゼンテーション）する技能を習得する。

個人

- (1) 授業で得た知識を整理し、論理的かつ読み易いレポートを作成できる。
- (2) 温泉に関する幅広い知識を説明できる。

<グループ B>

科目名：一般教育演習「生命（いのち）を科学する」

一般目標：

必ずしも正しい答えのない問題に対して、自らの意見を形成するために、生命を題材にして、問題を適切に設定する能力・論を形成する能力を身につける。

行動目標：

- (1) 生命を成り立たせている物質的基盤を把握できる。
- (2) 生命についての多種多様な考えを理解する。
- (3) 生命についての様々な問題について自ら、問題設定出来る能力を養う。

<グループ C>

科目名：一般教育演習「わたしのエコライフ宣言ーキャンパス編ー」

一般目標：

地球環境問題について理解を深めるために学生がまずは自らの問題として捉え行動できるようになる。

行動目標：

- (1) 自分たちに与えられたテーマについて、問題点と課題を説明できる。
- (2) グループの中で自分の意見を述べ、討論できる。
- (3) プレゼンテーション能力を身に付ける。

<グループ D>

科目名：特別講義「国際社会の中での日本人の役割」

一般目標：

国際人としての自覚を持ち、国際性を涵養する。

行動目標：

- (1) 日本と外国の文化・習慣の違いを列記できる。
- (2) 国際社会の中での日本の役割を説明できる。
- (3) 高邁な野心を抱く。
- (4) 行動の目標をたてることができる。

<グループ E>

科目名：総合講義「『だまし』の構造～人はなぜだまされるのか？～」

キーワード：心理・脳波・宗教・神・文化・擬態・だまし絵・歴史

一般目標：

人間という生物には、「だまし」の構造が必然である。

「だまし」という2面性を軸とした自然・文化史の総合的・比較的解説によって、専門分野に進む前段階の学生が多角的な見方を学ぶ。

クリティカルシンキングという「科学する」ためのリテラシーを体得する。

行動目標：

- (1) 社会における事象を自分自身で発見し、多角的に説明することができる。
- (2) 自然文化社会におけるだましの事例と成立の背景を説明できる。

生涯学習 LIFELONG LEARNING

「インターンシップ体験発表会・情報交換会」を開催

12月11日(月)クラーク会館において、生涯学習計画研究部とキャリアセンターの主催で、「インターンシップ体験発表会・情報交換会」を開催しました。

インターンシップへの参加意識を高め、企業・学生・大学相互の理解を深めることなどを目的として、次年度以降のインターンシップの参加を検討している学生やインターンシップ生を受け入れていただいた企業の担当者の方々など計41名の参加がありました。

まず、夏休み期間などを活用してインターンシップに参加した4名の学生が、実習先企業での学習内容や、志望動機、インターンシップの魅力・効果な

どについて、パワーポイントを使用して充実した体験談を発表してくれました。

インターンシップの参加により大きく成長した参加者の熱意あふれる発表に、出席者は真剣に聞き入り、発表者各々への質問も相次ぎました。

その後、企業の担当者と学生に分かれ、各々インターンシップに関する情報交換が行われました。企業の担当者との情報交換会においては、生涯学習計画研究部亀野助教授の進行により、実施に当たっての大学側への要望や学生の参加態度などについて活発なディスカッションが行われ、予定時間を超過して盛況のうちに終了しました。

センター日誌 CENTER EVENTS, *October- November*

10月

- 1日 ・(訪問) 大阪香里丘高校
- 4日 ・(会議) 第1回拡大教育システム弾力化検討専門委員会
- 5日 ・(会議) 北海道進学コンソーシアム実施委員会
- 6日 ・(訪問) 長野県飯田風越高校
- 10日 ・(訪問) 長野県長野高校
- 11日 ・(訪問) 愛媛県新田高校
- 11日～18日
 - ・(行事) AO 入試願書受付
- 12日 ・(会議) 「主題別科目・外国語関係科目・日本語」科目責任者会議
 - ・(会議) 「共通科目・基礎科目」科目責任者会議
 - ・(CVP) 留学生向けキャンパスツアー
- 13日 ・(訪問) 香川県大手前高松高校
- 14日 ・(CVP) 第4回市民向けキャンパスツアー
- 17日 ・(訪問) 岩見沢緑陵高校
- 18日 ・(訪問) 静岡大成高校
- 19日, 20日
 - ・(訪問) 福岡大学附属大濠高校
- 24日 ・高等教育機能開発総合センター, 附属図書館北分館, 国際広報メディア研究科・言語文化部, 情報教育館・放送大学北海道学習センター合同消防訓練
- 25日 ・センターニュース 第67号発行
- 26日 ・(会議) 第2回拡大教育システム弾力化検討専門委員会
- 30日 ・(会議) 第38回生涯学習計画研究委員会

11月

- 1日 ・(会議) AO 入試委員会, 入学者選抜委員会
- 2日 ・(会議) 平成18年度第7回教育改革室会議
 - ・(行事) AO 入試第1次選考結果通知
- 7日 ・(会議) 第135回全学教育委員会小委員会
- 8日 ・(会議) 第11回学部・大学院教育検討WG
 - ・(訪問) 札幌新川高校 PTA
- 10日 ・(訪問) 清里高校
- 11日 ・(説明会) 国立大学進学説明会 (札幌)
- 10日～11日
 - ・(行事) 第9回FD研修会 (奈井江町農業構造改善センター)
- 14日 ・(会議) 第3回拡大教育システム弾力化検討専門委員会
- 16日 ・(訪問) 札幌稲北高校
- 19日 ・(行事) AO 入試第2次選考日
- 21日 ・(会議) GPA・上限設定・成績評価実施検討WG
- 22日 ・(訪問) 浦河高校
- 28日 ・(会議) 成績評価・授業評価結果専門部会
- 29日 ・(会議) 第4回拡大教育システム弾力化検討専門委員会
- 30日 ・(会議) 大学院教育イニシアティブ・医療人GP等合同報告会実行委員会

行事予定 SCHEDULE, December - March

【日(曜日)】	【行事】	【備考】
1月 5(金)	授業再開	
20(土)～21(日)	大学入試センター試験【19(金)休講】	
23(火)～24(水)及び	補講日	
30(火)～31(水)		
31(水)	第2学期業終了	
2月 1(木)～14(水)	定期試験	
19(月)正午	定期試験成績提出締切	
15(木)～19(月)	追試験	
20(火)正午	追試験成績提出締切	
25(日)	北海道大学第2次入学試験(前期日程)	
3月 12(月)	北海道大学第2次入学試験(後期日程)	
中旬～下旬	学科等分属手続	当該学部

e-Learning システム HuWeb 利用者募集中

2002年10月から運用を開始しましたHuWebは、利用科目数が90科目を超え120余名の教員が利用するようになりました。学生の登録者数はのべ3000名を数えるようになりました。2004年からは留学生のための英語版HuWebも稼働しています。

一週間に一回しか顔を合わせることができなかったクラスの学生や教師が、このシステムを利用することで、いつでも連絡を取ることができるようになります。HuWebは5つの機能を備えたコミュニケーション・ツールで、学生と教師の情報交換の場を、教室内だけではなく教科別のホームページへと広げます。それぞれの科目のホームページでは、図と文

字で構成される任意の形態のホームページ、学生が書き込める掲示板(ミーティングルーム)、学生全員に一度に送れるメーリングシステム、任意のホームページへのリンク、任意のフォーマットのデータをやりとりできるアップロード・ダウンロードシステムを独自に利用できます。

学期途中でも登録できます。ご利用ご希望の方は、以下の連絡先までメールをお送り下さい。

申込先

高等教育機能開発総合センター 細川 敏幸

e-mail : thoso@high.hokudai.ac.jp

図3 HuWebのトップページ

センターニュース 2006, No. 68 目次

巻頭言	大野 公裕……………1	インターンシップ体験発表会・情報交換会を開催……………13
全学教育委員会報告(第66回)……………3		センター日誌……………14
18年度新科目 情報学		行事予定……………15
大内 東, 栗原正仁, 郷原一寿, 岡部成玄……………6		目次・編集後記……………16
「単位の実質化」は本当か? その偽装を憂う		
下澤 楯夫……………8		
単位の実質化の方策		
—北大教育ワークショップ開催される—……………10		

「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 -」原稿募集

高等教育開発機能総合センターでは、毎年1回「高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 -」を発行しています。本誌は、広く高等教育に関する論議を高め、知識・情報を共有するための発表の場として活用さ

れ、これまでに14号まで出版されています。投稿資格は特に問いません。投稿規定は本誌の巻末か、高等教育開発研究部のホームページをご参照ください。原稿の締切は1月末日です。

編集後記

あっという間に師走である。マスコミでは今年の重大ニュースが報じられているが、世の中の変化が早すぎるのか、年初の出来事はもはや遠い過去のように感じてしまう。

世の中の変化に対応することは重要であるが、その際に、時代が変わっても不変であるもの、変化のスピードはゆっくりではあるが長期的に一定の方向に変化しているもの、短期間のうちに目まぐるしく変化するものをしっかりと見極め、また、その中で重要なものとそうでないものを峻別する能力が一層求められる。

教育という成果が発現するのに時間がかかることに携わる者として常にこのような視点を持ち続けることが重要ではないだろうか。(かめ)

センターニュース 第68号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2006年12月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話(011)716-2111・FAX(011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村 純・町井輝久

安藤 厚・川初清典・山岸みどり・鈴木 誠

池田文人・亀野 淳

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX(011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>